

油田和歌子さんをお迎えして

ゆりの木グループ五月にて

2018年5月26日（土）10時～12時

町田友の家にて

司会 JM

お話「ミセス羽仁からの宿題」

私のことですが、私は93才、1925年生まれ、自由学園に入学したのは、昭和一三年で、その前の年に支那事変が始まって、卒業が20年3月17日、3月10日に東京大空襲があって、卒業式の時、ステージの上で、卒業式そのものよりも、今ここに来てくださっている方たちを、もし今空襲警報が鳴ったらどこの防空壕に入っていたらいいかな、などと考えていました。そのあと少し学校に残っていました。

自由学園としてはその頃戦争が始まって、その年に北京生活学校もできましたが、ミセス羽仁は平和のことを考えたいと願っていました。中国という国は日本と違って本当に大きな国で、その時によって政府がかわったりして、ミセス羽仁は政治的な意味は全くなくて、中国の人と本当に心を通わせて、神様は一人、私たちのお父様は一人、そして人と人との付き合いをしないと、そこからいろいろなことが始まっていくということで、北京生活学校ができたりした時代です。

戦争中のことですが、私が高等科2年の時に寮長をしていて、その時、一人学校に具合の悪い人がいて、結核が発病していました。皆さんは近づけず、私は一番元気で、BCGを受けていたので一人看病にあたりました。その後、私も濃厚感染をしてしまい、家に帰った次の日から熱を出して、高等科3年は4月から休学しました。その頃はクラスメイトは皆、学徒動員されていました。その頃は一人一人工場に行く人数もきちんと登録されていて、私はその人数からはずれていました。その後、医者からもう学校に行ってもいいだろうといわれて、九月の末ごろになって学校に行きました。

その頃はいろいろと配給で、羽仁先生の家は燃料小屋に燃料がどのくらいあるか、炭なども配給だが、在庫調べ等を頼まれたりしました。燃料小屋に友達と二人で行きました。夕方遅くなって、朝夕はお手伝いのような方が来ていたが、その方が丁度帰ったところを見ていたので、夕方暗くもなって、友達と今日の晩ご飯は誰が作るのだろうと話して、それなら私たちで作ろうということになった。二人で勝手に献立を決めて、学校の食堂部へ行って、材料をいただいてきて、夕食の用意をしました。いつも夜、学校の仕事の報告をしに行ったときに先生方のお夕食の様子も見ていたので、テーブルも整えて、食事の設定をしていました。やっとできたなーと思った頃に玄関から声がきこえて、羽仁先生夫妻がおかえりになった。誰が作ったのかおもしろいわねーなどと言いながら帰りました。

それからまた、片付けも誰かがしなくてはならないので、委員の方々が報告に来て、応接間で話をしている間に片付けをしました。そっと片付けていたのに、先生は気が付かれて来られて、今日お料理を作ったのはあなたたちかい、とてもおいしかったよ、ありがとうといわれて、明日からも作りに来てくれるかと頼まれました。それから朝夜のお食事を友人と二人で作りました。朝は、ミセス羽仁はご飯とお味噌汁、ミスタ羽仁はパン、パンのない時はホットケーキをつくったりして、お昼は学校で生徒と一緒に召しあがりました。私も友達もおじいさん、おばあさんと暮らしたこともあるのでお年寄りの献立も知っていて、学校の料理とは違ったものを作りました。味はもっと薄くしなさいと言われてたりもしました。ミセス羽仁からは家の押し入れを片付けてと頼まれたり、お洗濯もしたり、自分の家のようにしていました。あなたたちが手伝ってくれて嬉しいといわれたりしました。ミスタ羽仁は、とうとう生徒たちがこんなところまで攻めてきたか、などと言われました。当時は生徒が学徒動員で直接先生と接することは難しい中、私たちはちょっとしたことがきっかけで、すぐおそばで過ごすことができました。

私自身のことですが、終戦になって、体の具合がよくなって、学校に残っていましたが、家に帰った方がいいかなとも思いました。また親元をあまり長く離れていたから、いずれは結婚して親元を離れねばならないから、両親とともに暮らす機会がない、寮生活をしていて、帰らないこともあったので、ミセス羽仁に家に帰りたいと言ったら、それはとても大事だといわれた。そのとき、両親は神戸にいましたが、戦後長崎に移りました。その時にミセス羽仁とはいろいろとお話をしたが、結婚ということ、大事にしなさいと言われた。結婚して家庭をもって初めて一人前だ。一人でものを考えるのは一人一人だが、人としての生活としては家庭が大事だといわれた。また、勉強すること、広く学ぶことが大事だということ、ミセス羽仁もミスタ羽仁も大学を出ていなかったけれど、自分で広く学んできた。もう一つは信仰のこと。人は何を信じて生きていくのか、

生きていく上での中心だと言われた。あなたは どう思うかと言われた。私はわかりませんと言った。わかりませんと言ったからにはこちらにも責任があるわけです。長崎に帰って一人で聖書を読みました。東京にいれば学校に通うこともできたのですが。両親はクリスチャンではなかったのですが、長崎で私は教会に通い出して、いろいろと教えていただいて洗礼を受けました。

家に帰ってまず第一にしたのは、戦争中であまり勉強ができなかったので、まず、羽仁先生から教えていただいたことの復習をしようと思った。どんな復習かというと、著作集をまず読んで、それからほかの勉強をしようと思った。著作集全一七巻を読みました。全部読むのに二年半くらいかかった。第一巻は「人間編」、それから「思想しつつ」が三巻、「悩める友のために」が三巻あります。私は折に触れて読んでいましたが、「悩める友のために」は、その時初めて読みました。その時に、本当に感激しました。いわゆる人生相談で、ミセス羽仁に問いかけて、それに答えるものです、ほかの本でしたら、あなたのこういうところが足りないから、こうなさいと回答をしているが、ミセス羽仁は共に悩んでいる。悩みのない人はいない、悩みのない人は鈍感な人か、自分のことしか考えない人である。本当は世の中に悩みはいくらでもある。「我らすべての悩み」という題につけてもいいけれど「悩める友のために」とした。一人一人の悩みを聞いて深い同情をしている。悩みをもっていること自身に意味がある。ここから抜け出したいと思うからこそ悩みがあるので、これでいいと思えば悩みはない。そこを出発点にしてしっかりなさいといわれ、そこに助言をして、ミセス羽仁の暖かさに触れた気がしました。それが直接ミセス羽仁に教えていただいたことです。

ミセス羽仁は友の会が力をもらうことだけではなく、力を出すことだと言われたが、いい力だけではなくて困っていることを素直に出すことも大事だと言われた。そして困っていることをありのままに出すことが大事だと言われた。母からも聞いたことだが、最初、友の会の最寄りを作るときに、友の会ではなんでも本当のことを出し合っていると思った。初めは何時など時間を決めず、曜日だけ決めて、集まれることから始めた。そのうちに時間も決まっていった。出席者一人で一年ぐらいは続けるくらいでないと最寄りは出来ないわよと言われました。会場の人とリーダーがいればそこで二人になるけれど、そうなのかなと思いました。お互いにありのままを出し合いながら、いい刺激を与え合い、共に生活をし、それを他の人にも広げていこうということでした。

友の会はミセス羽仁が作ったのではなく、婦人之友の愛読者会というものがあって一人一人がバラバラでいるのではなく、ともに学ぶ組織ができるといいねとミセス羽仁が

望んでいて、愛読者の気が合って、まずは長岡で始まり、第二が岡山、第三が大阪、奈良、神戸、横浜、横須賀、東京は十三番目です。ミセス羽仁が友の会を作ったのではなく、ミセス羽仁は家庭がこうあったら良いなということを掲げて、読者がそれに応じて、お互いの連絡を作りたいとあって、生まれてきたものです。長岡、岡山、大阪、奈良と出来て東京もできて、その翌年に全国大会が出来ました。三十友の会でした。そこで友の会の大会決議が出来ました。友の会の決議はなかなか立派ですね。名簿にあります。（読む）これが第一回の友の会の決議文です。

日本には家族制度というものがあって、例えば、障害がある人たちは、その家族の中で何とか問題を助け合っていた。家族制度がなくなり、今は社会の制度、助け合いができるようになったが、本当に社会の暖かい助け合い制度にまではまだ育っていないと思う。家族制度に代わる世の中の新しい良い秩序ができていくように、友の会でもそうした意味で、いろいろな方が入ってお互いに良い力を出して欲しいと思っています。

子育てのことですが、子供はどんどん大きくなりますね。待っていてくれと言っても待っていない。だから、子供の幼い間の親子の交わりは人としての基礎だと思う。今は若くから託児所などに子供を預けて女性が働く方もあるけれど、親子のお互いの良い人情、家庭的な助け合いが育っていないように思う。仕事を持つのは良いことだが、子供が小さい時に仕事に没頭して、子供の心の具合がなおざりにしていると、これは後から取り返しがつかないことである。小さい時は仕事をしてもいいけれど、子供が独立してしまうまでの親子の交わりは大事だと思う。子供は必ず独立してしまうわけですから、それからの自分としての働き、生き方も出来ると思う。その辺の理解が社会全体で出来れば良いなと思っています。

（テープ起こしによる記録 2018年度グループリーダー、ES）